

5月1日は、新天皇が即位され、「令和」の時代となりました。この元号は、日本独特で、西暦との併用の際、少々、混乱してしまいましたが、私は、2つの呼び名を持つ日本固有の年号が嫌いではありません。みなさんは、どうお考えでしょうか？

個人的なお話で恐縮ですが、実は、令和になって2日目に、私の父が急死しました。年齢は88歳でしたが、亡くなる1時間前まで、いつもと同じように元気で、変わったところはまったくありませんでした。その父が、体調不良を訴え、救急搬送されてから、わずか1時間ほどで、亡くなってしまいました。腹部大動脈瘤破裂という診断でした。

今日は、一生勉強を続けた私の父について、お話したいと思います。父が亡くなってから一番困ったことが、本の整理でした。父は、北炭の社員を経て、研究職となり、北海道大学から工学博士の学位を取得しました。大学時代から、天才肌の理数系で、父の古くからの友人からは、「オ（サイ）」と呼ばれていたようです。北炭では、石炭工学を専門に、また晩年まで、科学技術庁や特許庁の英語とドイツ語の翻訳をしていました。そのため、父の部屋は、本に埋まっていて、専門書やぶ厚い辞書などでいっぱいになっていました。その本を処分するに当たり、母と私は、これらの本をゴミにしてしまうことができず、東京神田神保町の古本屋さんに整理をお願いしました。すべての本を整理するのに4時間かかりました。その古本屋さんが言ったのは、「お父さん、勉強しすぎです。」と「1000冊ありましたが、すべての本に目を通していましたね。」という2つの言葉でした。本の専門家によって父の膨大な書物が整理されたことで、父も喜んでくれていると思います。

父は亡くなる直前まで、本を読んでいた。晩年は、母と散歩をすることが多く、庭に咲く花の名前や木々の名前を覚えることも好きで、難しい専門書の中に、植物の本や、俳句など、特に正岡子規の本も混ざっていました。ほかにも、油絵を描くための道具や、美術関係の本もあり、父は、専門ばかりではなく、さまざまなことに興味を持ち、たくさんの知識を持っていた人でした。また、自分の部屋に本棚を自作したり、大工仕事も得意でした。生前は、なんでも直してくれる父がいて当たり前でしたが、いなくなって初めて父の多彩さを実感しています。

今月は、ピアノレッスンとは違う内容になってしまいましたが、実は、この父の生き方には、生涯学習のヒントがあります。80歳を過ぎても翻訳の仕事をし、その合間に自然を愛し、俳句や絵画に親しみ、1000冊の本を読んで過ごす人生は、考えてみますと、年をとっても知識を得る意欲を失わず、65年連れ添った母と晩年をゆっくりと楽しんでいたように思います。圧迫骨折で体調を崩した母には、通院やお買い物などにもいつも付き添い、ご近所ではおしどり夫婦と言われていたようです。急死してしまった父ですが、苦しむことなく穏やかにあつという間に旅立ったことは、幸せなことだったのかもしれない。

父のお話をお聞きいただき、ありがとうございます。